

42. 興味ある経過を示した二次性副甲状腺機能亢進症の一例

岡村 光英 小泉 義子 福田 照男

井上 佑一 下西 祥裕 江田 穂積

小堺 和久 越智 宏暢 小野山靖人

(大阪市大・放)

長期血液透析患者の骨変化を骨シンチで経過観察し、15年目に胸腔内異所性副甲状腺過形成を副甲状腺シンチ(Tl)で検出し得た症例を経験したので、新しい骨塩定量測定法である dual photon bone densitometry(DBD)による測定結果をも加えて報告した。

症例は15年前から血液透析を受けている41歳女性で、7年前に施行した初回の骨シンチで肺・腎の骨外異常集積を認めた。その後骨関節痛、血清ALP, c-PTHの高値を示し、二次性副甲状腺機能亢進症の診断のもとに1年前、副甲状腺亜全摘術が他院にて施行され、頸部の4腺が摘出された。しかしその後も骨関節痛の増強、ALP, c-PTHの高値が続き、異所性副甲状腺腫瘍が疑われ、当院にて副甲状腺シンチが施行された。Tlシンチ、SPECTにて前縦隔にhot spotを認めた。副甲状腺腫瘍と診断し、腫瘍摘出が行われ、腫瘍は3×2.5cm, 6.4gの副甲状腺過形成であった。

透析後8年目の初回骨シンチでは肺・腎へのRI骨外異常集積を認めた。15年目の骨シンチでは骨全体とくに頭蓋骨、頸骨へのRI集積が増強し、二次性副甲状腺機能亢進症が主体のpatternとなり、肺・腎へのRI集積は減少した。胸腔内副甲状腺腫瘍摘出術後1か月の骨シンチでは頭蓋骨、頸骨のRI集積が術前と比べ明らかに減少した。一方、術前低値を示したDBDによる頭蓋骨骨塩量の値には変化がみられなかった。

腎性骨異常養症を長期観察し、興味ある骨シンチパターンの変化がみられた。胸腔内異所性副甲状腺腫瘍の診断にTlシンチがきわめて有用であった。副甲状腺腫瘍摘出術後1か月の骨変化は骨塩量測定より骨シンチの方が鋭敏に捉えられた。

43. 高感度RIAによる尿中微量アルブミン測定の基礎的検討ならびに糖尿病性腎症早期診断への応用

生水 晃 西川 光重 梅田 幸久

永田登志子 稲田 满夫 (関西医大・二内)

目的：ヒトアルブミン(HSA)の高感度なRIAを確立して、定性的に尿蛋白陰性の糖尿病患者の尿中微量アルブミンを測定した。さらに、尿中NAGとも比較し、糖尿病性腎症早期診断への応用を試みた。方法：HSAの抗体は家兎を用いて作り、¹²⁵I標識アルブミンはMilesらの方法に準じて作製した。臨床応用として試験紙法で尿蛋白陰性の糖尿病患者29例、健常者9名を対象とした。NAGはNAGテスト(シオノギ)で測定しクレアチニン(Cr)で補正した。結果：本RIAは希釈試験、回収試験(回収率：103%)および再現性(測定内変動係数：8.6%，測定間変動係数：12.4%)はいずれも良好であった。NAG、BSAと交差反応は示さず、最小検出濃度は0.4ng/tubeと高感度であり、臨床応用は十分可能であった。正常人の一日尿中アルブミン排泄量は7.3±2.8mgであったが、糖尿病患者では有意に高値を示した。正常者の尿中アルブミンは体位により変動し(立位尿>一日蓄尿>早朝尿)，糖尿病患者ではさらにその変動が大きかった。一日蓄尿中アルブミン排泄率(AER)と早朝尿アルブミン指数(AI)は有意の正相間($r=0.78$)を示した。しかし、尿中NAG排泄も糖尿病患者で正常より有意に高値であったが、早朝尿AIとNAG指数は有意の相関を示さなかった。結論：尿中アルブミン測定の高感度RIAを開発した。尿中アルブミン排泄の指標として、採取が簡便で、体位の変動の影響をほとんど受けない早朝尿AIが有用であり、糖尿病性腎症早期発見には尿中NAG指数とともに尿中アルブミン指数の測定が重要であると考えられた。

44. モノクローナル抗体を用いたSCCリアビーズキットの基礎的および臨床的検討

那須 浩二 羽渕 洋子 半田 文子

尾藤 早苗 山口 晴二 才木 康彦

伊藤 秀臣 日野 恵 池窪 勝治

(神戸市立中央市民病院・核)

SCCリアビーズキット(ダイナボット社)は新しく開発されたモノクローナル抗体を用いたサンドイッチ